

氏 名	山崎 歩
(ふりがな)	(やまさき あゆみ)
学位の種類	博士(看護学)
学位授与番号	甲 第2号
学位審査年月日	平成29年3月8日
学位授与の要件	学位規程第3条第1項該当
学位論文題名	1型糖尿病をもつ女性の思春期・青年期における セルフマネジメントの獲得に関する研究 Acquisition of Self-Management Skill in Girls with Type 1 Diabetes during Pubertry and Adolescence
論文審査委員	(主) 教授 荒木 孝治 教授 林 優子 教授 泊 祐子

学位論文内容の要旨

【緒言】

小児1型糖尿病の発症年齢のピークは11~12歳、男女比では女兒が6割を占めている。1型糖尿病は一生を通じて疾患管理が必要となり、思春期には自身での療養行動の判断や対処が実践できるようになる。療養行動の移行が完了する思春期は、一般的にアイデンティティやジェンダーアイデンティティを確立する時期であり心理的变化が大きい。同時に、二次性徴の影響で思春期後期になると血糖コントロール自体も難しくなる。特に女性の場合は、性周期に伴う血糖変動もみられ男性と異なる疾患管理の課題や困難性を持ち、それまでとは異なる療養行動の調整が必要になることが推測される。

【目的】

本研究は、学童期までに1型糖尿病を発症した女性の思春期・青年期におけるセルフマネジメント獲得プロセスを明確化することを目的とした。

【方法】

第一研究では、1型糖尿病患者の思春期・青年期での自己管理に関連する要因を国内外の24文献を対象に文献研究を実施した。第二研究では、学童期までに1型糖尿病を発症し、現在、青年期に達した女性18人に半構成面接を行い、インタビューデータは、木下の修正版グラウンデッド・セオリー(M-GTA)を用いて分析した。分析のテーマは「思春期・青年期での学校生活を含めた日常生活での療養行動や困難、そこでの対処、工夫、その結果の変化やその際の自身の思いや考え」とした。

【結果および結論】

第一研究は国内外計24文献を分析し、自己管理に関連する5要因が明らかとなった。5要因は、医療者からの疾患知識やインスリン注射、血糖測定のス��ル教育や、キャンプを用いて教育プログラムを実施することでの自己管理の変化を示した【教育支援による知識・ス��ルの習得と自己管理の変化】、家族との関係性や両親とともに教育支援を実施することでの相互の関係性の変化が自己管理に影響していることを示した【家族との関係の影響からくる自己管理の変化】、主に同じ病気をもつ友人との関わりから生じる自己管理の変化を示した【ソーシャルサポートから生じる自己管理の変化】、子ども自

身の心理面と自己管理との関連を示した【心理面と自己管理の関連】、日常生活での食事療法、血糖測定回数やインスリン調整の実施状況と自己管理との関連を示した【療養行動の実施と自己管理との関連】に分類された。

第二研究の対象者 18 人の平均年齢は 24.0 歳 (19-34 歳)、平均発症年齢 8.1 歳 (2-14 歳)、平均罹病期間は 16.3 年 (6-28 年)、平均インタビュー時間は 64.8 分 (42-101 分) であった。対象者 18 人の発症時期は幼児期 6 人、学童前期 5 人、学童後期 5 人、中学生 2 人であり、初潮は学童後期 8 人、中学生 9 人、時期不明 1 人であった。糖尿病キャンプへの過去の参加経験は 12 人であった。分析の結果から 8 カテゴリーと 23 概念が抽出された。思春期・青年期におけるセルフマネジメント獲得プロセスは【自分の身体を判った気になる】、【病気を忘れ楽しみを優先する】、【体調を調整する下地づくり】、【身体感覚がずれる】、【差別や比較から病気を認識する】、【先を見据えて生活や療養を見直す】、【体験から得た知恵と知識を駆使する】、【常につきまとう面倒くささ】から構成された。そのプロセスは、病気を忘れ生活を優先したい『面倒くささが優先する時期』と、生活の立て直しに入る『療養を見直し知恵を駆使する時期』の 2 つの時期に大別された。『面倒くささが優先する時期』には、療養行動に慣れが生じ【自分の身体を判った気になる】ことで【病気を忘れ楽しさを優先する】生活となる楽しい生活の中で、療養行動が不十分となり【身体感覚がずれる】体験をしていた。『療養を見直し知恵を駆使する時期』への移行は病状の悪化や一人暮らし、就職などがきっかけとなって、【先を見据えて生活や療養を見直す】ことをはじめ、【体験から得た知恵と知識を駆使する】ことへと繋がっていた。思春期の初めから【体調を調整する下地づくり】のなかで血糖コントロールの試行錯誤を繰り返す【体験から得た知恵と知識を駆使する】に結び付いていた。また、療養行動には、【常につきまとう面倒くささ】を持ちながらも【先を見据えて生活や療養を見直す】機会から【体験から得た知恵と知識を駆使する】段階に至る中で面倒くささは徐々に軽減していた。20 歳前後の時期に〔身体感覚が研ぎ澄まされる〕感覚を得ていたが性差との関連性は、今回の研究では明確にはできなかった。

キーワード ; 1 型糖尿病, 女性, 小児期発症, セルフマネジメント, 思春期・青年期

論文審査結果の要旨

本論文では第 1 研究 (文献研究) にて、国内外計 24 文献を分析し、1 型糖尿病患者の思春期・青年期での自己管理に関連する要因を整理し、セルフマネジメントの獲得に対する看護に求められる取り組みとして、①思春期・青年期の心理・社会的な発達的特徴と課題を踏まえた支援、②自己管理のためのプログラム開発の必要性、③小児 1 型糖尿病患者を看る専門の看護師育成の必要性を指摘した。この研究成果を受けて研究者は第 2 研究 (主論文) にて上記の①の課題に取り組み、現在は明確にされていない「1 型糖尿病をもつ女性の思春期・青年期にかけて変化する身体や発達に合わせたセルフマネジメント獲得のプロセス」の研究を行った。

研究者は学童期迄に 1 型糖尿病を発症し、高校を卒業して 18 歳~30 歳代前半に達した女性 18 人を対象者としてインタビューを行い、収集したデータを木下の修正版 Grounded Theory Approach を用いて分析し 8 カテゴリーと 23 概念を抽出した。それらはセルフマネジメントに焦点を当てながら、1 型糖尿病を患った女性の、思春期から成人期にかけての心理社会的な身体感覚の変化を見事に捉えたものであり、極めて独創性の高いものである。

研究者によるストーリーラインによれば、患者は思春期初期の【自分の身体を判った気になる】状態から同時期が進みにつれ、【差別や比較から病気を認識する】、また【病気を忘れ楽しさを優先する】成り行きへと向かうが、やがて【身体感覚がずれる】感覚をもつに至る。しかしこの“ずれ”は、療養行動の適切だった学童期の感覚の記憶があるからこそであると研究者はいう。やがて、思春期が進みにつれて、注射を隠して打つなど患者は【常につきまとう面倒くささ】を持ち続ける。しかしその一方で、血糖コントロールを自分なりに試行錯誤するなど【体調を調整する下づくり】が並行して始まっていく。研究者によれば、この「下づくり」を繰り返すことが実は面倒くささを乗り越えることにつながっていくという。患者は青年期を迎えて、自分の身体の母性性に気づき、また、一人暮らしや就職等の体験を経て、【先を見据えて生活や療養を見直す】時期に転換していく。そして 20 歳前後には血糖の実測値と身体感覚を結び付けることができたりするなど、【体験から得た知恵と知識を駆使】して成人期に入っていくとする。

上記のセルフマネジメントの形成過程の成果は臨床の場で患者支援に活用しうる意義がある。また、1 型糖尿病の女性患者の思春期から成人期にかけての微妙なフェルトセンスの変化を引き出そうとした点では発展性のある研究である。

以上から本論文は本学大学院学則第 11 条の博士 (看護学) の学位の授与に値すると認める。